

問題・解答
用紙番号

1

の解答用紙に解答しなさい。

国

語

〈受験学部・学科〉

法学部、外国語学部、経済学部、経営学部、
看護学部、農学部【文系科目型】

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(五五点)

十二世紀に編纂された『今昔物語集』に収録された話である。

いまは昔、讃岐国の多度郡たどこおりに源大夫げんだいふという極めつけの悪人がいた。殺生を好み、人の首を切ることにさえなんとも思わないような人間だった。

ある日、郎等をともなつての獵からの帰り道、お堂に人が集まって講を営んでいるところに行き会った源大夫は、ふとした気まぐれから、様子をみようとなかに入り込んだ。
1 の乱暴者として知られた源大夫の登場に、聴衆は固唾を飲んで成り行きを見守った。

恐怖心を飲み込んで、法会ほうえの講師は話を始めた。——この世から西に向かつて多くの世界を過ぎたところに、阿弥陀仏とくというたいへん心の広い仏様がおいでになる。長年罪を積んだ者でも、一度阿弥陀仏と称とくえれば、必ずその人を救い取ってくれる……。

この講話を聞いた源大夫は、突然出家を決意する。その場で髪を剃り、戒を受け、まことの心で弥陀の名を呼べば仏も答えてくれるという講師の言葉を信じ、鉦かねを叩き念仏しながら、ひたすら西を目指すのである。

七日後に源大夫を訪ねる約束をしたある寺の住持がその跡を追うと、西に海を
2 峰に生えた二股の木の上に源大夫がいて、相変わらず鉦を叩いて弥陀を呼び続けていた。どこまでも西に行って、海に入ろうとしたが、この場所で阿弥陀仏が答えてくれたので、そのまま留まっている、と源大夫は話した。

奇異に思った住持が、いったいどんな答えが返ってきたのかと問うと、源大夫の呼びかけに応じて、海中から聞いたこともないようなすばらしい声で、「ここにいる」という言葉が聞こえてきた。

いったんそこを離れた住持が七日後に戻ってみると、源大夫は前と同じ姿勢のまま、木の股に座って西を向いて死んでいた。口からは鮮やかな蓮華れんげが一葉生えていた。だれもが源大夫の往生を確信した……。

^A 現代人と異なる中世人の世界観のもっとも顕著な特色は、この世とは別次元に存在すると信じられた彼岸世界に対する強烈なリアリティだった。中世人の生はこの世だけで完結することはなかった。この現実世界での一生を終えた後、どこかに実在する理想世界に生まれ変わることが大方の中世人の究極の目的だった。源大夫もまた、はるか西方にいるという阿弥陀仏とその浄土を求め、残された寿命と引き換えに、そこへの到達を目指したのである。

もちろん現代の日本でも、天国や極楽などの実在を信じる熱心な信者はたくさんいる。しかし、日々の生活において、彼岸世界は実際にどれだけの重みをもっているであろうか。まず現実の人生があり、それがおしまいになりそうになってはじめて死後の問題がクローズアップされてくるというのが、たとえ信仰者であっても現代人の普通の生き方ではなからうか。

X、中世では違った。この世の人生は、すべて死後の彼岸世界への再生のために費やされるのがあるべき姿だった。場合によってはこの世での生を早く切り上げても、あの世への到達が優先される必要があったのである。

そうした中世人の人生観が **3** ^B 示される事例が、十一世紀頃から流行する捨身往生だった。捨身往生は異相往生などもよばれるが、要するに自身の身命と引き換えに往生を実現しようとする試みである。

院政期の文人貴族、三善みよしの為康の『拾遺往生伝』は、康平年中（一〇五八―六五）に阿弥陀峰の下で身を焼いて入滅した上人の逸話を収めている。焼身の時刻には、結縁けちえんするために大勢の貴賤男女が集まった。同時刻に慶寛という僧侶がみた夢では、遙か西方から音楽が近づき、これは今日阿弥陀峰で焼身した上人を来迎する儀であると教える声が聞こえたという。

このエピソードのように、捨身往生には多くの見物者が集まるのが常だった。長徳元年（九九五）九月に、六波羅ろくはら蜜寺の僧が菩提寺ぼだいの北辺で焼身供養した際には、これを見るために花山かざん天皇や貴族たちが出かけている（『日本紀略』）。

一生身の人間が薪を積み上げた火中で焼け死んでいくのを見物するという行為は、現代人の感覚からすると到底趣味のよいものとはいえない。しかし、中世人にとってはまったく意味が違っていった。捨身は罪にまとわれた身体を真理のために捧げることが意味しており、実行者はその強烈な信念によって必ず浄土への生まれ変わりが実現すると信じられていた。往生の瞬間に同じ場所に居合わせ、化仏けぶつが来迎する機会を捉えてみずからの往生を祈願することが、当時の人々の考える救済への一番の近道だったのである。

捨身往生は火中入定以外にもさまざまな方法がとられた。『沙石集』には首つりをした往生者の

例がみえるが、多いのは入水往生だった。『宇治拾遺物語』には、桂川へ身投げした僧の話が出ている。「一遍聖絵」には、一遍上人の死を悲しんだ弟子たちが、師とともに浄土に行くことを願って、四天王寺門前の海に入水する場面が描かれている。

私たちからすれば自殺としかみえないこうした捨身往生が繰り返される背景には、当時の人々が共有していた、異次元世界にある理想の浄土の实在に対する揺るぎない信念があったのである。

Y、中世ではなぜ人は死後に別世界を目指さなければならなかったのであろうか。その背景にあったのが、この世が救済者を欠く無仏世界だという認識である。

娑婆世界（此土）とよばれる現実世界は、釈迦がクシナガラに入滅して以降、仏のいない世だった。仏教の柱となる思想の一つに、あたかも薬の有効期限のように、釈迦仏が亡くなってから時間が経つにつれて、しだいにその教えの効力が薄れていくという見方がある。中世社会に流行する末法思想が、まさにそれであった。薬効が完全に切れてしまう時期が、末法という時代だったのである。

いつから末法に入るかについては諸説があったが、仏滅後二千年とするのがもつとも有力な説だった。一般的に、仏滅は周の穆王五十三年（紀元前九四九）と信じられていたので、二千年を経た末法第一年は永承七年（一〇五二）ということになる。撰関政治が全盛期を迎え、藤原頼通が平等院鳳凰堂を建立したころ、日本では既存の仏法が力を失う末法の時代を迎えたと認識されたのである。

釈迦の教えが効力を失い、衆生が救済から疎外される時代が来るとすれば、末法の人々はなにを頼りにしていけばいいのであろうか。

仏教的な世界観では、この宇宙には娑婆以外にも無数の世界があり、その一つ一つに仏がいるとされた。清浄なる仏の国「仏国土」であるために、それらの世界は「浄土」とよばれた。此岸である現実世界に対し、他界の浄土はしばしば「彼岸」と総称された。釈迦が入滅して娑婆世界が無仏の世になったとしても、広く宇宙を見渡せば、仏のいる彼岸世界はほかにいくらかでも存在するのである。源大夫が求めた極楽浄土の阿弥陀仏はその代表だった。極楽は西のはるか彼方にあると信じられていたため、西方浄土ともよばれた。

他界の浄土には、ほかに「密厳浄土」「靈山浄土」「普陀落浄土」などさまざまなものがあつた。これらはそれぞれ別の概念ではなく、中世人が共有していた究極の理想世界のイメージの異称と捉えるべきであると私は考えている。彼岸世界のイメージや彼岸と現世との距離は、それを説く宗派や個人によって異なっていたが、宇宙の根源に民族や時代を超えた究極の真理の世界が実在すると考える点において、中世の人々は同じ思考の枠組みをもっていたのである。

こうした世界観を共有するゆえに、現実世界に生を受けた人間はたとえこの無仏世界で救われなくとも、彼岸のどこかの仏と縁を結ぶことによって、その力で救済が成就すると考えられた。娑婆

世界での生を終えた後にみずから信じる仏の世界に転生することが、大方の人々の目標となった。日本列島において十一世紀からコウヨウ^①し、十二、十三世紀にピークを迎える浄土信仰がまさしくそれだった。法然や親鸞の説いた専修念仏の教えは、そうした浄土信仰の奔流のなから生まれたものだったのである。

ただし、浄土信仰には一つ問題があった。彼岸の仏たちは本質的に遠い別世界の存在であったため、娑婆世界の衆生が直接その姿を目にすることはできなかった。彼岸に理想の浄土が実在し、そこに往生することによって救われると説いても、根性のねじ曲がった世紀末の悪人がそうした抽象的な説明を受け入れることは容易ではなかった。だれもみたことのない浄土のすばらしさを、いかにして末法の大衆に理解させるかという難問が、高い壁となって立ちふさがることになったのである。

この課題を解決する鍵となったのが、仏像だった。インドに生まれた釈迦が入滅すると、釈迦を思慕する人々は彼をソウキ^②するためのシヨウチヨウ^③として、仏足石や法輪、菩提樹などを用いるようになった。そうした抽象的なシンボルは、やがて釈迦に似せた像へと進化し、その機能もたんなる思慕の手段から、それ自体が信仰の対象へと変化していく。

六世紀に百済から日本へ仏教が伝えられたとき、仏像も一緒に伝来した。そのきらびやかな姿に人々がカンメイ^④を受けた様子は、『日本書紀』に記述されている。それ以降、仏の姿を画像化したもの^⑤は仏像は寺院の中心伽藍である金堂や本堂に安置され、聖なる存在としてスウハイ^⑤された。平安時代の初めに編纂される日本最初の仏教説話集である『日本靈異記』^{りよういき}には、仏像のもたらす多くの靈験譚^{たん}が収録されている。

D 仏教伝来が始まる日本の仏像信仰は、平安時代半ばを転機として、その機能が大きく変容する。人々の仏教に対する要望が、この世で降りかかる災難の防止や現世利益から、死後の救済へと重点を移し変えていくのである。それは不可視の彼岸世界のイメージが膨らみ、浄土信仰が興隆していく現象と対応するものだった。

浄土への憧憬の念が高まるにつれて、仏像はこの世とあの世をつなぐ役割を期待されるようになり、釈迦仏以外のさまざまな他界の仏の像が造立されるようになった。仏像はこの世の望みを叶えてくれるものというより、人々をあの世に向かわせるべく、その背中を押してくれる存在と考えられるようになった。

もちろん、仏教伝来の初期の段階から、日本に釈迦以外の仏像が渡来していた可能性は高い。朝鮮半島では早くから弥勒信仰が広く行われており、新羅の故地である慶州の博物館には、日本への仏教伝来に先行する多数の弥勒菩薩の金銅像が収蔵されている。中国では北魏時代の六世紀に、阿彌陀信仰が盛んとなった。

しかし、そうした多種多様な仏像も、他界表象が未発達であった古代日本においては、人々の彼

岸志向を喚起し、死後の救済に対する渴望の念を強めるという役割を果たすことはなかった。そこでは仏像の種類に関わりなく、靈験と現世利益が仏像の主たる機能だった。当時の人々にとっては、人知を超える不思議な威力を示し、襲いかかる災いを未然に防ぐ力において、釈迦像も弥勒像も観音像もなんら変わるものではなかったのである。

(佐藤弘夫『死者の花嫁』)

問一 波線部①～⑤と同じ漢字を含むものを、次のア～オのうちからそれぞれ一つ選びなさい。

① コウヨウ

ア ヨクヨウをつけて滑らかに話す

イ 生半可な知識でカタカナ語をランヨウする

ウ 藩閥政治に反対して憲政をヨウゴする

エ 子供を一人前にヨウイクするのは容易ではない

オ ラクヨウした木々の梢こずえを夕日が照らす

② ソウキ

ア 勝利にカンキの声をあげる

イ 大量のごみを不法にトウキする

ウ 大怪我からのサイキを果たす

エ 万一に備えて救護班がタイキする

オ 都心部の地価がトウキしている

③ ショウチヨウ

ア 会議のために関係者をショウシユウする

イ 不思議なインシヨウを与える

ウ 校長になるためのショウニン試験を受ける

エ 天神橋筋六丁目を「天六」とリヤクシヨウする

オ 昨年度のデータをサンシヨウする

④ カンメイ

- ア 人権尊重の理念にキョウメイする
- イ メイメツするネオンサインを眺める
- ウ ロシアカクメイの歴史を振り返る
- エ メイガラを指定してお米を買う
- オ メイヨある地位を占めたいと思う

⑤ スウハイ

- ア 墓碑のハイメンに刻まれた文字を読む
- イ 通信社が新しいニュースをハイシンする
- ウ 選挙にハイボクして開発を中止する
- エ 度重なる戦争で国土がコウハイする
- オ 友人のアイデアをハイシヤクする

問二 空欄

1

3

に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|--------------------------|---|------|---|-------|
| 1 | ア 箔 <small>はく</small> 付き | 2 | ア 渡る | 3 | ア 静的に |
| イ | ひも付き | イ | 隔てる | イ | 端的に |
| ウ | 札付き | ウ | 結ぶ | ウ | 公的に |
| エ | 尾頭付き | エ | 望む | エ | 全的に |
| オ | お墨付き | オ | 泳ぐ | オ | 知的に |

問三 傍線部A「現代人と異なる中世人の世界観」の説明として適切でないものを、次のア～オのうちから一つ選びなさい。

- ア いま生きているこの世と、それとは別次元のあの世がリアリティをもって存在している。
- イ この世での生を終えた後、あの世に生まれ変わることこそが、人生の究極の目標である。
- ウ 人生の終わりが近づく前であっても、死後の再生の問題はすべてに優先されるべきものである。
- エ 生きている間は現実の人生を楽しみつつ、極楽浄土の存在を熱心に信じるべきである。
- オ あの世に生まれ変わるためなら、この世の人生を多少犠牲にしてもかまわない。

問四 空欄

X

Y

に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|---|------|---|---|---------|
| X | ア | そのうえ | Y | ア | それにしても |
| | イ | それゆえ | | イ | というのも |
| | ウ | ところで | | ウ | あるいは |
| | エ | けれども | | エ | したがって |
| | オ | すなわち | | オ | とはいうものの |

問五 傍線部B「十一世紀頃から流行する捨身往生」について述べた説明として、最も適切なものを

を次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 天皇や貴族が出かけてみる価値のある風流な趣味として認められていた。
- イ 死の苦しみを信念によって克服する実行力に人の強さを見出していた。
- ウ 往生する者を迎えに来る仏に近づき、みずからの往生を願う機会と信じられていた。
- エ ささまざまな手段で繰り返される捨身の見物は、ありふれた行為に過ぎなかった。
- オ みずからの命を投げ出す者を師と仰ぎ、師とともに浄土に行くことを願うものであった。

問六 傍線部C「浄土信仰には一つ問題があった」とあるが、筆者はどのような問題があったと考

えているのか。最も適切なものを次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 彼岸の仏たちは遠い別世界にいるため、だれもが会えるわけではないこと。
- イ 世紀末の人間が、根性がねじ曲がって信仰を受け入れられない悪人であること。
- ウ 現実世界に生きる人間が、けっきょくこの世では救われないこと。
- エ だれもみたことがないために、浄土についての説明が抽象的となってしまうこと。
- オ 大衆が疑り深く、浄土のすばらしさを理解しても信じようとはしなかったこと。

問七 傍線部D「仏教伝来に始まる日本の仏像信仰」についての説明として適切でないものを、次のア～オのうちから一つ選びなさい。

ア 古代日本においては、彼岸世界のイメージが豊かではなく、仏像への信仰をみずからの死と結び付ける発想は乏しかった。

イ 朝鮮半島からの伝来当初において、仏像は、人知を超える威力をもってこの世の望みを叶えてくれるものとして人々の信仰を集めた。

ウ 弥勒菩薩や阿弥陀如来といった釈迦以外の仏像が渡来したことに影響されて、浄土信仰が盛んになり、死後の救済が期待されるようになった。

エ 浄土信仰が興隆するにつれて造立されるようになったさまざまな仏像は、人々があの世に行くのを助けるものと期待された。

オ 仏像信仰の機能が大きく変わるより前の時代においては、仏像の種類によってその役割に大きな違いはなかった。

問八 次のア～オについて、本文の内容に合致しているものにはa、合致していないものにはbをそれぞれマークしなさい。

ア 『今昔物語集』に登場する源大夫は、殺生を好む極めつけの悪人であったが、阿弥陀仏に救われて例外的に往生したものと信じられた。

イ 現代の日本人であっても死後の世界の実在を信じる者は少なくないが、仮にそうだとした場合、日々の生活においては現実の人生のことが優先されているのが普通である。

ウ 中世においては、浄土への生まれ変わりを早く実現するために身を捨てて命を投げ出すことが流行するが、この行為は当時の人々にとって救済への唯一の道だと考えられた。

エ 釈迦の教えが効力を失い、救済者を欠く末法の時代だと認識されたからこそ、中世日本人々はこの世の生に執着せず、仏のいる彼岸世界に救済を求めた。

オ 日本への仏教伝来ルートであった朝鮮半島ではかつて弥勒信仰が盛んであったが、この信仰は日本へ伝わっていない。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

エチオピアでの経験から話を始めよう。最初にエチオピアを訪れたのは、もう二十年近く前のことだ。ほとんど海外に出たこともなかった二十歳そこそこのころ。十カ月あまりの滞在期間の大半をエチオピア人に囲まれて過ごした。

それまで、自分はあまり感情的にならない人間だと思っていた。人とぶつかることもそれほどなく、どちらかといえば冷めた少年だった。それが、エチオピアにいるときは、まるで違っていた。なにをやるにしても、物事がすんなり運ばない。タクシーに乗るにも、物を買うにも、値段の交渉から始まる。町を歩けば、子どもたちにおちよぐられ、大人からは質問攻めにあう。調査のために役所を訪れると、「今日は人がいないから明日来い」と何日も引き延ばされる。「ここじゃない、あっちの窓口だ」と、たらいまわしにされる。話がうまくいったと思ったら最後に賄賂を要求される……。

言葉の通じにくさもあって、懸命に身振り手振りを交えて話したり、大声を出して激昂してしまったりする自分がいた。

村で過ごしているあいだも、生活のすべてがつねに他人との関わりの中にあって、ひとりのプライベートな時間など、ほとんどない。いい意味でも、悪い意味でも、つねにある種の刺激にさらされ続けていた。食事のときは、いつもみんなでひとつの大きな皿を囲み、「もつと食べろ」と声をかけあい、互いに気遣いながら食べていた。

村にはまだ電気がなかった。食後はランプの灯りのもとで、おじいさんの話に耳を傾け、息子たちと腹を抱えて笑い転げたり、真顔で驚いたり、にぎやかで心温まる時間があった。

村のなかにひとり「外国人」がいることで、いろんないざこざが起きて、なぜこんなうまくいかないんだと、涙が止まらない日もあった。

毎朝、木陰にテーブルを出して、前日の日記をつけるのが日課だった。ふと見上げると、抜けるような青空から木漏れ日がさし、小鳥のさえずりだけが聞こえる。さわやかな風に梢が揺れる。おばあさんが炒るコーヒーのいい香りが漂ってくる。自分はなんて幸せなんだろうと、心からうっとりした。

腹の底から笑ったり、激しく憤慨したり、幸福感に浸ったり、毎日が喜怒哀楽に満ちた時間だった。顔の筋肉も休まることなく、つねにいろんな表情を浮かべていた気がする。

そんな生活を終えて、日本に戻ったとき、不思議な感覚に陥った。関西国際空港に着くと、すべてがすんなり進んでいく。なんの不自由も、憤りや戸惑いも感じる必要がない。バスのチケットは自動券売機ですぐに買えて、数秒も変わらず定刻ぴったりに出発する。動き出したバスに向かって深々とお辞儀する女性従業員の姿に、びっくりして振り返ってしまった。

一人との関わりのなかで生じる厄介で面倒なことが注意深く取り除かれ、できるだけストレスを感じないで済むシステムがつくられていた。

おそらく、お辞儀する女性は感情を交えて関わり合う「人」ではなく、券売機の「ご利用ありがとうございます」という機械音と同じ「記号」だった。

つねに心に波風が立たず、一定の振幅におさまるように保たれている。その洗練された仕組みの数々に、逆カルチャーショックを受けた。

そのうち、自分がもとの感情の起伏に乏しい「自分」に戻っていることに気づいた。顔の表情筋の動きも、すっかり緩慢になった。顔つきまで変わっていたかもしれない。いったい、エチオピアにいたときの「自分」は「だれ」だったのだろうか？ そんなことも考えた。

でも日本の生活で、まったく感情が生じないわけではなかった。テレビでは、新商品を宣伝するために過剰なくらい趣向を凝らしたCMが繰り返し流され、物欲をかき立てていた。それまで疑問もなく観ていたお笑い番組も、無理に笑うという「反応」を強いられているように思えた。そんなとき、ひとりテレビを観ながら浮かぶ「笑い」は、「感情」と呼ぶにはほど遠い、薄っぺらで、すぐに跡形もなく消えてしまう軽いものだった。

多くの感情のなかで、特定の感情／欲求のみが喚起され、多くは抑制されているような感覚。エチオピアにいるときにくらべ、自分のなかに生じる感情の動きに、ある種の「いびつさ」を感じた。どこか意図的に操作されているようにも思えた。

日本は、感情をコントロールしている社会なのかもしれない。

最初にエチオピアから帰国したときにもった違和感を、いまもときどき思い出すことがある。たぶん急に学生のひとり暮らしに戻ったことも関係していたと思う。

^I二十年以上を過ごしてきた日本の環境に、わずか十カ月のエチオピア滞在から戻って感じた「ずれ」は、いったいなにを意味しているのだろうか？

エチオピアのほうが「よい」と言っているのではない。いまもエチオピアの田舎に行くと、たまには誰とも会わず、ひとり快適な都会のホテルにこもって映画でも観ていたと思う。町ゆく一人ひとりと顔を見合わせながら、毎回、握手したり、あいさつの言葉を交わしたりするのは、とても面倒くさい。

人類学のフィールドワークでは、他者との深い関わりのなかに身をゆだねる。気心の知れた人と過ごすだけではないので、ときに想像もつかない状況に立たされ、戸惑う。「フィールド」になじんだ身体は、今度は「ホーム」に戻って、また別の「ずれ」を経験する。

人類学は、この自分の居場所と調査地とを往復するなかで生じる「ずれ」や「違和感」を手がかりに思考を進める。それは、ぼくらがあたりまえに過ごしてきた現実が、ある特殊なあり方で構築されている可能性に気づかせてくれる。

人類学では「ホーム」と「フィールド」との往復が欠かせない。そして、その両者が思考の対象となる。人類学といえ、よく遠くの国の異文化について研究していると思われてしまうが、人類学者はたんにフィールドの「かれら」だけを調査しているわけではない。

エチオピアにいくと、日本とは違う感情の生じ方を経験する。そこから、日本社会の感情をめぐる環境の特殊さに気づくこともできるし、それまで疑問をもたなかった「感情とはなにか？」という根本的な問いにも自覚的になれる。

人類学者が向き合う問いの多くは、最初から自分のなかにあるものではない。「ホーム」と「フィールド」を往き来するなかで、あるとき到来するものなのだ。

感情とは、たんなる神経系の反応なのだろうか。ある人の心の固有な表現とはいえないのではないか。それは他者との関わり方に起因しているのではないか？

最初にエチオピアから日本に帰国したときに感じた「ずれ」を振り返ると、そう思える。

そもそも、ぼくらは感情をどう感じているだろうか？

涙がこぼれるとき、そこに「悲しみ」があるのは、わかりきったことかもしれない。でも、涙は悲しいときだけ流れるわけではない。目にゴミが入ったときも、あくびをしたときも涙は出る。そんなとき、自分が悲しんでいるとは思わない。

「悲しみ」は「涙」という印だけから、そこにあると理解されるわけではない。では、なぜ自分
II
のなかの感情が「悲しみ」や「怒り」だとわかるのか？

感情が生じるときの心の動きをじっくり観察してみよう。

過去にあった悲しい出来事を思い出してみる。なんだか目の奥がうずうずしたり、胸がもやもやしたり……。

次に、怒りを感じる場面を思い浮かべてみる。わずかに目の周りに力が入ったり、胸の奥に熱いものが流れる感じがしたり……。

やってみるとよくわかるけど、ぼくらはこうした感情を「悲しみ」や「怒り」という言葉以上にうまく表現する語彙をもたない。あるいは、「悲しみ」や「怒り」といった言葉を手がかりにして、はじめて胸の奥にわきあがる「なにか」に意味を与えることができている。

だから、ぼくらは知らない言葉の感情を感じることができない。

古典の教科書に出てくるような「ものあわれ」という言葉の意味を知らなければ、「いやあ、ものあわれを感じるなあ」とは言えない。でも言葉を知り、その「感じ」がぼんやりとでもわかると、そうした感情を覚えることができる。そして、そのとたん、そこで感じた「なにか」は「ものあわれ」としか表現しよがなくなる。

あるいは、「今日は、ハッピーだ！」というときの気分と、「私は幸せ者です」というときの気分は、ちよつと違う。どこが違うのか、きちんと説明できなくてもよい。「なんとなく違う」と

いうだけで、ぼくらはふたつの感情を感じ分けることができる。

これは、感情が身体的な生理現象だけではないことの証拠でもある。もちろん、心のなかの「なにか」は脳内の反応とつながっているのだろうけど、「言葉」は、それに「かたち」を与え、分類や区別を可能にし、経験のリアリティを支える。

感情を「わかる」ための手がかりは「言葉」だけではない。

母親が赤ん坊をあやしむながら、ふくれっ面をする。ぼくらは、母親がほんとうに怒っているわけではないことをわかっている。「涙」や「顔の表情」といった外的に表示される印は、周囲の文脈のなかで理解される。

店員とのモノのやりとりではなにも感じないのに、家族のあいだの同じようなモノのやりとりには感情がこもっているように思える。

感情を引き起こす刺激には、人とモノの配置やそれらの関係といった文脈全体が含まれている。そこでは、行為する人やそれを見ている人が、どのようにその文脈と関わっているのが重要になる。

「悲しい」という感情を「わかる」ために、鏡で自分の顔を確認したり、心のなかに生起する反応をそのつど脳波モニターで確認したりする必要はない。それらはいずれも文脈を問わない理解の仕方だ。

ある映画をじつと観ている。ストーリーの展開、雰囲気のある音楽、すつと流れ出る涙。こうした人とモノの配置から、ぼくらは自分のなかに生じる「なにか」が「悲しみ」だと疑いなく感じとる。このとき脳内でどういう反応が起きているかは関係ない。

だとしたら、とたんに外的な「刺激」と内的な「反応」という線引き自体があやしくなる。人と対象との関わり方自体が、刺激や反応の意味を決めているからだ。

そして、感情が社会的な文脈で生じるのであれば、それは自分だけの「こころ」の表現とはいえない。悲しみや怒りは、ある特定の人やモノの配置にそって意味が確定され、「涙」や「顔の表情」がひとつのリアルな「感情」として理解可能になる。

感情の意味は、さまざまな人やモノとの関わりのなかで決まる。だからこそ、同じ対象や場面でも、違った反応を引き起こすことになる。

エチオピアの地方の映画館でレオナルド・ディカプリオが主演した『タイタニック』を観ていたときのことだ。最後、氷山にぶつかった客船が傾き、甲板の手すりにしがみついていた人が海へと落下していく。凄惨な出来事の胸をしめつけられる結末……。

映画館では、この場面で大爆笑が起こった。エチオピア人の観客は、人が落下していく様子がおかしくて仕方ないようだった。満員の観客が手を叩きながら、互いに顔を見合わせて笑っている姿が、いまでも目に浮かぶ。

感情という不思議。でも、それを理解することが、どう社会の構築とつながっているのだろうか？

感情は、人やモノの配置／関係のなかで生じ、はじめて理解できるようになる。だから、他人との関係が変われば、感情の生じ方にも違いがでる。苦しんだり、悲しんだりしていたことが、人やモノの関係が少しずれるだけで変わる可能性がある。

前に書いたように、日本では、自然と感情を生じさせるような状況が社会から排除されている。それは人と人とのやりとりを「経済化＝商品交換化」してきた結果でもある。

商品交換は、やりとりの関係を一回で完結／精算させる。「負い目」や「感謝」といったモノのやりとりに生じやすい思いや感情は「A」にされる。そこで対面する「人」は、脱感情化された交換相手でしかない。与えるべきものを与え、もらうものをもらったら、その関係は終わる。この交換の関係は、コミュニケーションの基盤となる「共感」を抑圧する。

人は、相手がなにを考え、感じているかわからないと、コミュニケーションを始めることができない。道を歩いていると、見覚えのある人がやってくる。名前が思い出せない。相手も自分のことを忘れていくかもしれない。ちらちらと様子を見て、こちらに気づかないようであれば、声をかけにくい。

でも、ふと目が合ったとき、相手が笑顔になれば、自然とコミュニケーションが始まる。相手の言葉や表情の意味を読みとる（＝共感する）ことが、その場にふさわしいコミュニケーションを進める鍵となる。

子どもをあやしてふくれっ面をする母親に、「なにを怒っているの！」と咎める人は、適切なコミュニケーションができない。表現された感情の意味を感じとるには、他者のしぐさの置かれている文脈に自分自身をBさせる必要がある。

哲学者のメルロ＝ポンティは言う。

「他人の身体を知覚するのは、まさに私の身体であり、これはそこに、いわば自分自身の諸志向の奇跡的な延長を、つまり世界を取り扱うなじみ深い仕方を見いだすのである」。(『知覚の現象学』)

感情は、人やモノの配置／関係に沿って生じる。だから、人は、つねにその文脈に寄り添い、他者の身体に生起しているであろう「なにか」を自分のものとして感じ、その意味を読みとろうとする。そうしてはじめて、自分の感情を適切に表現し、相手の感情の意味に沿ったコミュニケーションが可能になる。

自分の思いを表現し、他者の思いに共感する。これは、人類が進化によって獲得してきた卓抜した能力のひとつだ。人間ほど顔の表情筋が発達している動物はいない。飼犬の感情を読みとれる人もいるかもしれないが、人間以外の動物は極端に表情に乏しい。

「笑う犬」という表現に「おかしさ」があるのは、ふつう犬が人間のように顔全体の筋肉を使って「笑い」を表現できないからだ。それはまさに「身体的に」に制約されている。

霊長類学者の山極壽一さんによると、ゴリラなど人間に近い霊長類でも、ほとんど白目がない。これは相手に感情を読みとられないようにするためだ。人間は進化の過程で、あえて白目の部分を大きくし、瞳の動きを相手にさらすことを選んだ。そうして互いに感情を示しあい、共感が生じる可能性を身体的に保証することで、社会的な存在となってきた。

とはいえ、顔の表情が豊かであれば、相手の内面が手にとるようにわかるわけではない。「笑顔」はつねに「好意」を示しているわけではない。愛想笑いも、苦笑いも、サービスの笑顔も、いろいろある。ある程度まで、その笑顔の背後にある文脈を把握しないと、会話などのコミュニケーションを続けるのに支障が出てしまう。共感の能力がそれを可能にしている。

感情／共感は、ふつうルールに則^{のぞ}って作動する。このモノのやりとりは「商品交換」ですよ、と値札やレジ、店員の制服といった装置が明示している。そこでは感情や共感が抑制される。同じようにリボンや包装、返礼までの時間差は「贈り物」の印になる。そこには思いや感情が込められていると感じる。まるで配置される人やモノに感情を引き出したり押し込めたりするスイッチが埋め込まれているかのようだ。

いろんなモノや人がひとつの輪としてつながること、その輪の一部を構成する「わたし」に感情が生じていると言ってもいい。交換や贈与というモノを介したコミュニケーションは、まさにその「輪」をつなげたり、切り離したりする行為なのだ。

お金と商品の交換にくらべ、贈り物のやりとりには、読みとるべき思いや感情がいろいろあって、神経をつかう。誰もが、恋人や友人へのプレゼントやお祝いになにを贈れば喜んでもらえるか、相手のことを思い浮かべながら頭を悩ませた経験があるだろう。レジの前で店員にお金をどう渡せばよいか悩む人はいない。交換にくらべると、贈与はたいへんだ。それをうまくこなすには、ある種の「技」が必要になる。

エチオピアには、贈与の関係があふれている。ふつうに商品交換が行われるような場でも、すぐ贈与の関係になってしまう。

たとえば、あなたがご飯を食べようとレストランに入る。と、知人が食事をしている。ここで相手がエチオピア人なら、かならず「一緒に食べる（インニ・ブラ）！」と言われる。「食欲」という欲求は容易に共感され、「独り占め」をうしろめたく感じさせ、「相手にふるまう」ことを求める。道を歩いているだけで、見知らぬ人たちから、「食べる」と声をかけられることも多い。

逆に、あなたがなにかを食べているときに知り合いが通りかかれば、食べないとわかっていても、「一緒に食べましょう」と声をかけるのが礼儀だ。心配しなくても、相手も適切に状況を読んで、（嘘でも）「いま食べたからいいよ」とか言ってくれる。

どうせ食べないのなら、なぜ、こんな面倒なことを繰り返すのか？ 問題は食べるか、食べないか、ではない。お互いが情に満ちた贈与／共感の関係にあることを、そのつど確認する作業をしているのだ。

（松村圭一郎『うしろめたさの人類学』）

問一 波線部 a～d の言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

a 真顔で驚く

b 心に波風が立つ

ア 表情にださずに驚く

ア 怒りの気持ちがわき上がる

イ 驚いて真面目な顔になる

イ そわそわした気持ちになる

ウ びっくり仰天する

ウ あれこれと迷いが起こる

エ 驚いているふりをする

エ 気持ちの上で乱れが生じる

c 趣向を凝らす

d 気心の知れた

ア 自分の好みに合わせる

ア 信用できると分かっている

イ 面白くなるように工夫をする

イ 力量をよく知っている

ウ いつもとやり方を変える

ウ 同じような考えを持っている

エ 相手に気に入られるようにする

エ 人として尊敬をしている

問二 傍線部 I 「二十年以上を過ごしてきた日本の環境に、わずか十カ月のエチオピア滞在から戻って感じた「ずれ」とあるが、筆者が感じた違和感について述べた次のア～エのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア エチオピアでは物事がすんなり運ばなかったことに激高したこともあったのに、日本ではすべてがすんなり進んでいき、憤りや戸惑いも感じなかったこと。

イ エチオピアでは、喜怒哀楽に満ちた毎日を過ごしていたのに対して、日本に帰るともとの感情の起伏に乏しい「自分」に戻っていたことに気づいたこと。

ウ エチオピアから帰国した空港からの帰途、動き出したバスに向かって深々とお辞儀をする女性従業員の姿に、日本のシステムに対するカルチャーショックを感じたこと。

エ エチオピアではすべてがつねに他人との関わりのなかにあつて、ひとりのプライベートな時間などなかったが、日本では急に学生の一人暮らしに戻ったこと。

オ エチオピアにいるときに比べて、日本でテレビ番組を観ながら自分のなかに生じる感情の動きにある種の「いびつさ」を感じたこと。

問五 傍線部Ⅲ「交換や贈与というモノを介したコミュニケーション」について、筆者はどうか考えているか。最も適切なものを次のア～オのうちから選びなさい。

ア 商品交換の関係においても、コミュニケーションをとるためには相手と共感することが不可欠である。

イ モノのやりとりが商品交換だと分かるような場面では、感情や共感抑制され、贈り物だと分かる場面では、思いや感情が込められていると感ぜられる。

ウ モノを介したコミュニケーションが、商品交換としての意味を持ったり、贈与としての意味を持ったりするためには、社会のルールに従うことが欠かせない。

エ 交換や贈与というモノを介したコミュニケーションは、会話などのコミュニケーションとは異なり、感情をコントロールするスイッチのように働いている。

オ モノを介したコミュニケーションがうまくいったりいかなかったりすることで、人とモノが一つにつながっている「輪」がつながったり、切れたりする。

問六 次のア～カについて、本文の内容に合致しているものにはa、合致していないものにはbをそれぞれマークしなさい。

ア 筆者がエチオピアで暮らしたとき、物事がすんなり運ばなかったのは、エチオピアでは贈与の関係があふれているからだとも言える。

イ 人類学が調査研究のための主な手がかりとするのは、自分の居場所である「ホーム」からなじみのない「フィールド」へと赴いたときに生じる違和感である。

ウ 感情を引き起こす外的な刺激に内的な脳の反応が対応しているという考えに立つかぎり、映画を観たときに生じてくる感情について理解することはできない。

エ 母親が赤ん坊をあやしながらかくれっ面をしていても、ほんとうに怒っているのではないことが分かるのは、顔の表情そのものが怒っているときとは異なっているからである。

オ 人間の目の白目の部分が大きいことは、瞳の動きが相手にさらされ、相手に感情を読みとられるという身体的な制約となる。

カ エチオピアでは、見知らぬ人たちから「食べろ」と声をかけられても、適切に状況を読むで「いま食べたからいいよ」というのが礼儀である。